書目抄にはつとい 二

番外書冊

和書門
二〇六二七 號
九 函
三 架
一〇 冊
類

内閣文庫
和書
二〇六二七 號
一〇 冊
類
二〇二 函
八 架

内閣文庫
番號 和 20627
冊數 10 (2)
函號 202 182

綴じ部（喉部分）の文字等が開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

躋壽館藏書
日本政府圖書

春雨抄第二　伊下

仁

一 にしき

秋乃ちくさも採る花の錦かな　祇

ゆく人や錦をきて山の風　巴

山とみる九そきれ表　秋うらひきす宮木わか錦　雪

めつらしくある人もあらそみし花の錦をこそみる　貞

庭の面ふるき紅のあやに行きも落ちる庭に絶みつやとあらそ　伴笑

行人の手さ袖にかさぬ萩その錦ととのえた地をゆき

行ききぬ織に車の錦たつる宮の衣法りかなる

をとみさかちりつく紋よりとろしくいうり

奥儀抄ニ云小車の錦の紐車にかけたる唐の六男に
あふ女の錦のたる面と思その丈る面かきけると
云抱とたくる紐とも云ル

後撰抄
小車のにしきのひもをときかけてあまたゝひねし君待かな

○ にしきをさらす 浅々我
時雨ゆく雲のこなたの入日影錦をさらす峯の紅葉ゝ

○ にしきのかけし 三百首
待人のかけしにしきのいろいろに露の玉ぬくひそそ 定家
錦のかけしは小車のひもとも見ゆる紅葉とそいふ
きらう紐とかけしくかにうせ侍や

○ にしきのうら 出雲 夫木抄
名にたかき錦の浦をきてみれはかつかぬあまはすくなかりけり

○ にしきゝ
錦木はみちのおくにて男の女をよはふにはこの木を立るにあふへきをはとりいれ
又あはしとおもふはとりいれさるをいふ事也
あまたのかすを立そへて千つかまてたつるとそいふ 詞花
千錦木女のかよふ心しのゝ道に立

一 にしき
信濃 落ちつもる紅葉を松に祇
今日の山の端のみ雲の雪 日
位あるさの雨をもうつくしの家に 越せはく水の味 月
斬とく山を山のみ 庭におく霜 うつて
ある人の本にちらてたまに紅葉や霜の下にふるる
花を鳥に霜月比 桃をし一人長い道

拾遺
ともみまつ人まつ宿のむかしハちりもまかふ風のまにまに庭の白雪　家隆

新古今
庭乃雪にわか跡つけて出つるをとはれにけりと人やみるらん　慈鎮

日
なかなかにとをすの秋ハ庭の面にしけるよもきの露も吉ハ夕風　清輔

まま
秋の夜乃庭乃面よ雨さへつをとすまの下陰の庭の凍れ　乃家

毎月一首
玉紀ひろ山下露の庭にすまぬところちるまの庭の秋の風　日

風雅
きりぎりすこゑハいつく枕のしたの庭の秋の風　永福院

新古今
庭乃面ハまたかハかぬに夕立のそらさりけなくすめる月かな　頼政

○にハ柳

まま
この泊りさく岸陰の庭の水よころも久こ花庭柳風　慈鎮

日
庭柳折しハたたき月の夜の花しく風のかゝり　和泉式部

○庭懐旧
又月毎にたえて庭よたまる水かな

為家
又月毎や又寺ものしらん庭懐草ゆくえしるしの年月の秋　俊成

○庭見草　萩や

日
露ハよろつの花よ庭見草なりつくりての庭にほふ　定家

○庭ゆき

よそくもなき雨の庭の庭ゆきぬる雨のよにけふの秋　為家

文義まま
君もみよ庭ちるこのもと秋の夜の月影そはなれそふる　後京極

拾玉集
又月毎にもやしたれみてかこ庭ちるをしらすねかひて　慈鎮

庭のあとをたつねて七夕の秋ニ琴をひく庭

○にハ海波

伊勢物語
わたつみのかさしにさすやいはひ長沖津母によくみてや出つらん　歌

文義
あひの海にこよくわしかりてそれみきまてそらの海わたり　つり海

○庭火

烏羽玉の夜もすから中なる庭火かな 祇

(百韻) うけたのむ神もあはれん冬ごもり さむき霜の庭火なき袖 浮く

(新撰莵玖波) たく庭火のかげの小夜ふかきけり 榊葉とる手枕よしろきさえ く

衆生のうへ雲ゐの庭火もえし 老の身もものうきわひしさ 駿 (めり)

住吉の庭火のかけのかすかにも 神もあはれやもろこしを 知

一 にたとへり 八十島のまつり かかけ

(新撰莵玖波) 君よ千代に千とせをのへて 庭火の影の静かなる夜の 宿

(万) 庭燎たく大宮人のなかきよのさむさにかはりそのなかき夜のさ 宿

(百句) かかけのともしの影もほのかにて 夜半のさむさに八十島をまつ

(凡雅) 篝火くらく更ゆくまゝに 庭火にかゝる月の影しらん

新撰に有まて八十島のもとのかけなき代には 忠良

渟熊折日本紀に云 木綿付鳥とは鶏をいふ とそ (かならずしも)

させる鶏に木綿をつけて四方の堺にてまつる 給

いふは東国に家にかへる鳥のかへらく

きこゆるは家の鶏也 但是ハイカ

常世の鳥ハ日本天乃岩戸にこもり給ひし時

なかせて御神出たまひしより (非常)

宮の庭鳥として鳴く明かるくいふなる事

せんとの為也

(新撰) 朝倉やむかし行つる鶏は常世にはなくとも鶏 (こゑ)

奥儀抄に唐に孟嘗君と云人あるかやかに秦をかくして都を (出むと)

還函谷関に夜中なれハ鶏のなくまねをして 関の

戸をあけさせて通りし

柱挿
天暦御記にくらましてそらにかゝれる鳥の形に

○にはたつみ　庭立

童濛抄云サツヘヒノ時神乃庭にて沙汰ス

未来日本紀
もろこしの屏風の名所をもみえ侍る神楽の庭火の　いふ

神楽のことをいふなり

○庭へくさき

十五夜一首云
さなきたに霜おきはつる冬の夜に光そへて庭のしら雪　定家

信ぐ集
さ夜衣かさねてもなほひさしき月のかけをそへて神楽の庭火　知家

百首内
女郎花庭にうつろふ露の庭火のかけそふる声きくに人まつ也　寂蓮

此語のこゝろにハいかなるかせ侍り

曉乃いふおほせ鳥のなくなくたへなるあさ風にたつ鳥よ　家隆

奥儀抄云すゝさきといふとそ鶺鴒なりとかや　日本紀

正説ハ稲負せる河氏ノ家ニ稲を負せたりといへり
得たるいはれありといへり
あまた説ありといへともいなおほせ鳥といふ名は人ハ庭たゝきといふなり
此言にいはく庭たゝきといふなり　又山鳥鶺鴒なくと云
いなおほせ鳥といふもちとりわたる也　又秋也
田に來るトリトイフ　是をよみてイナオホセトリハ庭
たゝきといふに鳴鳥也ともいはれたり
庭たゝきとは口傳

一　にはとり　或

八雲
おほ鳥の沖中川ハ絶ゆとも君にかたらふ事はつきせしやハ

良暹
にはとりのかけの垂尾の音二両いひ何やめや別れゆくへき

是ハ雨ニも

玉葉 芦の葉にかくれてすみし津の国のこやもあらはに冬はきにけり 永福門院

三嶋江の入江のまこも雨ふれはいとゝしほれて刈人もなし 家隆

母[illegible]嶋の[illegible]

風[illegible]浪よ[illegible]

八雲御抄 海藻とは[illegible]

玉も[illegible]文水[illegible]

一 にほの海

うらうらと花も匂へる[illegible] 孔

契り[illegible]島の海[illegible] 此

湖[illegible]湖海 孔

新古今 にほの海や月のひかりのうつろへは浪の花にも秋はみえけり 家隆

子哉 我袖の[illegible]

続古今 にほの海[illegible]嶋[illegible]浪[illegible] 飛鳥井

母[illegible]海[illegible]遠[illegible] 内親王

湖[illegible]浪花月[illegible]沖津[illegible]千鳥[illegible]

浦 名明月 何も奇あり

一 にほり

伊勢の海の清き渚は[illegible]水[illegible]

是ハ菩提寺[illegible]

にほ[illegible] 後京極

[illegible] 長

新古今 [illegible]

月清集
にこる世をなをすまさむとや法水なかれに月のひかりさすらん

慈鎮
なをかゝる法のなかれのたえせぬは入とも月のさえ

○にこりなき世

八雲
しらさきの雲かくれてや萬の花もにこりなき世の御かけとそみる

月清集
にこる世のならひもしらすうけそむるこゝろをしつかにすまはみよその月

一 にこる水

清輔抄
東路よりのほりける人ににこる水のあるをみせて此世ならぬことをくるしと
此よにこる水猿人のこれはくまんとすまてものそく所あとならん
そこにくみやと云つゝすゝむ事をうしやきこえん

一 にくき

信誹
小山田のかゝりしありさまことにあやしといふくひまかる袖に露そ

伊勢物語
わかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなん

一 にきかき　似合わる也
翁さひつゝにきわき若き事也
源氏の源内侍といひしなゝ老人にききなきあらしと有り

一 にくむ

拾遺
かくはかりにくむ人やありつらんさりとてはいつ文有る比月
御うへとは萬葉にはにくむと云ひ月をはいつとも也

於建
我こそはみてもわかるめ秋萩の花のよこしまに若き　伊勢

日
山たかみ花の色をもみるへきにたちかへる君か家の　備之

伊勢物語
ゆらしや夕かけ霧の名　秋　みちのへの道ひの霊の長
こちのくれ行くしれ君ゆくすさらつりしと思ふそ

梅枝
梅かえによにくきことのまさる人の道ひのさとのり

一 にゐとり　にえや

神中抄
仁井嶋とハ一かりせ給ゆゑ侍るそのかきねなりけるにてそ
奥儀抄云この哥五言にて新嘗の祭に田を
はらへ時に稲をひろふ人を集て初穂をとりてにえとして
御食を献也その時当方人をとそ人々ともにせしこのと
こゝにみえつゝ人を家にちらしはへりてとゝめ置のこと
らへ和よたそんやうとや

一 にえ 贄
御集
みえ南つる世にはかりに御世をへたゝりの御贄ハ捧ものを　御仁和皇
三百首
贄もろしの初とや出しにはつるの御供のよつりに祝やしるし　定家
贄たてつへし八色や諏訪の贄のまつりハ秋やまつりよ為禊と
そなへつる御たより初とり納之

一 にゐなめ 新嘗也
年中行事抄
みなみなや此りの初穂をまつく御酒給はる人
新嘗ハ會といふハ年の初穂を神にそなへまつる也　給ふ御
すへらきも天照大神にそへまつり給ふ其の後の君も食すとも
おとしの穂を取あつめて其後君もきこしめし侍る
給ふ氣なり食すとも給ふ御世の節會に給ふ名
日本紀に見ゆ其子の田にて番賀茂の哥合之

一 にゐ酒くら
伊勢物語
あらたまの年の三とせを待わひてたゝ今宵こそ新枕すれ
後京極
つれなさのいとゝ一夜の新枕なりたのむなりとも　後京極
五十首
まもりこしたよりの世の後の新枕さそふ月白なりける　定家
神中抄
菅の根の新稲を酒に初くみや祝そなへんにくゝるなよ

まよ遠さかりて三年ハ経と云梅てそことに住侍て新桜守とある

一 にゐくは山 新桑眉
まま
つくはねの新桑眉のきぬハあれと君かみけしそあやにきほしも

一 に井さり
陰たのめ年もに井さり 幾波山 牧
まま
新さりのそあろの一面ゝ人しらてや秋ハ岡てうさゝこめゐれ 公実

一 にゐし岡りり
くする
たのめて假え表蘆の屋 うちとて新酒さる時ハそ
致行
稲くうハ新酒さとよひ紀のくさ此ちり紀波ゐ人て御
酒わまてゐ蔓の新さの月もたえ川きゐ人の中く志遠 親

一 にふ 丹生 大和
ままた
桃人のうしや夢ま紀之家のうるへに山の河原も五月雨のころ 文恩
勅撰名所
ひとりのミ宿ハかれきかくまれにふの山の金よあゆへ なくうち

一 仁南 二万里 備中 小洞
合家
津洞物くこ海とるとりそうまへにさの里人今すら〳〵なり
まま
いくよ代も限ゐ世てハ百して二まの松風の聲 とまれ

一 にき 仁木
まま
かへし山や林のえくちよにきうまくその神わうのせへそ 後成 やと

一 にゐ紀川
未ゆり折
時紀なくまへもにきりて秋の田の穂きうつ錦とまそうて月哉 大納言

新古今
高き屋にのぼりて見れば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり　仁徳天皇

一　にごり　酒

新続古今
来ぬかたに八舟しるきけ九十百の日八家よりより秋ぞちられ　梓政

日本紀竟宴
秋風を入日の光の影の音もあまれにごりより行けり　月

新続古今
西よたかう月の梢の光に清く雲ぬいろこ紀明のこの山　明書

風も秋よりしむさうそ人に（自序）也

人ぞ入西に有明の雲さそ郎　歌

新続古今
くる梅も明るき夜衣の光　新あつさ西日に出ぬしきをさして

一　日
横雲をつきりれ末の怒りて　にごりよりの山のゆく月

一　月
のぼりひにごりの西流に有り　追風をよりこし舟にまちらる

新続古今
あげしえをつきてあれ夏のうつるにごりて秋のとかあきられ

新撰六帖
西にいさり来よるも衣まで舟ぞとうことの後人

○　にごりのうみ

続古今
西清海有風さうかる浪の出でうち取出し後よりしの御神　是貞

一　にごり河　山城

続後拾遺
なかる瀬やみかの河瀬に清掃せん岩こと波も秋風ら紀　儀成

新続古今
にごり河やみのあさ瀬をかさなりての世をそらさうつるも　光吉　衣

一　にごりえ　二四八也

清濁抄ニ二ヒ甚メトミヘテ又初夏九カてえぞり

あし瀬やまうち紀とし西を渡るにごりそこちひそとち　そうち

奥儀抄ニ云廿二ロ八初八すみちまひへ八せて尤もとそう

さもわう二ロ八初あまとてみんやあ八鶏八八数の

鳥とのひみうちまかり常八数なくにごりもし初八数ふ

き初く中島ニ六島しとあり八数の鳴ぬりまかり初音と

ゝかや二つハ始しやつのゝ恋ゝとかや
又同集乃大納言寿り　三三
後陰
とらへりいかよそけも部ニ行なるにゝつりし
神中抄云此二句ハ八読の集抄みしと二句ハと書て翔
読やうハ二句ハニ替下云事侭三十一字にかわる哥あり上ノ
句ニ字二字余下ノ句ニ余事ハあり上下ニ文字
不足ノ哥ハ不見然ニ二四八と旅ハ文字ニ足ぬ
いつくとらかつりしハ百く有とらけりいわハ為首し
かそり云実此本云と記しとらへり此哥云此儀ニ
付宗家宗家へ行枝ハ切しと云ゝわまてるやの
房ニ宗家也　古書ニ云郭云ハ山を出て都を左と
もとひへり京ニとらへりなくとよしけるや

一　にくの儀
花ゝ夜ゝ川雲風此とと　儀ゝも雨ゝ此ゝ景ハ雲
露ニ番ゝゝ山のした谷　いつゝかゝ儀よかゝん西宿り
枝ゝつゝ景ゝゝ雨の秋ゝして　ゝのかゝゝ雲ゝハゝ也

一　行く　虹
爪雅
かゝそはきにとゝむうけ橋　虹ゝゝやこの川上のゝり日見
月
虹のたちかりとの後ハ雲消く景ゝり晴ゝ白雨此あ死　儀也
みのさゝ景ゝり雨ハ晴初く山との尽ゝのゝゝを雲　秋行
村雨の絶るの空ニかゝらて何も晴ゝも行ゝゝ山かや　定家
毎2首
雨そゝく嵐のゝ紀空ゝ行ゝく虹ゝゝゝゝ山雲　為家

時雨つゝ虹かゝるや若狭ちかくしも紅葉ぬるてさきの山　安重

延喜式
打時雨虹かゝるわかさの下よりみちのおく海へかゝりてあるに

とやさ　虹の異名　尾房や

雲に文のはしのかけとえらして尾房かくれかゝりてさきの山　重頼

一　にお梅

夫木
人もとふ春をまちなき若ひとりそてありける花に鶯[illegible]うらみれ　読人不知

一　に初子　無名

白ひさけ桃さして梅花　孔

古今
桜色の白や柳あさみとり　柏

古今
雲ふかくうちけり山の雪　露ふかき[illegible]

新勅撰
山かけの色の袖に風吹く　たくひなき[illegible]

よみ人不知
枯はてる野の下草にも花ありてすゝしくかけり夕立のあと　定家

朔日新月の山の月のかたちつる妹と云ふにてぞ

奥儀抄云この哥は朔日は出る道の月は西の山

のそこにあるべくおよそくるゝ山こそといへるとあるの

心なりけりとて六月より日の使者として日本紀曰一云

伊弉諾伊弉冊二神日の神を生給ひ其光照らす国

内そ聖に然して天地のひさしく照まつる事為

大柱をもて天上にいたりて天の原の事をす

次に月神を生給ふその光日に付て日に次ぐ

とある宗書云二神天の下次の珠子を生[illegible]

十寸の鏡を取て昂化の神ととすなどいふ

十寸の鏡をとりて昂化して出る神を月神と

是天照日神月よみ也

右之前ノ心二神の食をきこしめすところと日月ハ是二神

出らしかしこく八百よろつの神もめくりあへんを以

定や 稲ノ両徳一にあらそ

一 にほや 八雲御抄にとりつきさて也

一 にこ草 和名に人小許草也

新撰菟玖波 新六 まつ

しく霜に指かくし玉柄かさして錦のかへるとうとも [illegible]

まつ

あふ紀の中のむかしにこ草にやかて秋をまつ人のなき 草まくら 衣笠内大臣

一 にゝ行

東ラ

表とて霧を [illegible] 夕日八重ひ世をなく [illegible] 金昭

一 二月 異名 梅見月 小草生月 衣更着

神中抄

とふ人をさそふ紀のさ小草生れ梅見月風の情を袖にかな 家

日

緑たつ春に色かさつ小草生月待えて武蔵野の原 兼昭

日

佐保姫の霞の衣更着のたつ紀日うけ此月の浦 補昌 [illegible]

一 にしの宮

業小舟をいかけさへ夕まくれ西の宮人さしまいりて

一 ほ

一 杜鵑 杜宇 子規 蜀魄 鵜鳥 別都 ほとゝぎす郭公 已上異名

四方にちりまじりても花なる郭公 長

時鳥こゑの花ちる五月かな 牧

袖をたちし琴をやならしきけん 柏

月影に鳴入山さへ郭公 山

有明のつまやる花の音よ郭公 新

いつきくも古こゑをせんなくきを 長

二こゑのうち花さてしばし郭公 柏

かくきく返遠山かの一声ならば

九重の嵐や初音ほとゝきす 新

一こゑの松にもて花なかりけん 柏

と朝そらにおりゆくまて時鳥　拾
ちりて花まつこゝまてこれは時鳥　新
月やまつ月を庭待ほとゝきす　也
いやきりしもの夕月の時鳥　類
一こゑは月やまつ雲ほとゝきす　新
待と云人傷もなかなくきゝと　久
思河引 里らく三テ
有利ぞ庭里は首都のほとゝきす　新
法の末を云て世也人郭公　類
夏衣か思ふ寝覚の時鳥
新歌
我か往来は声の雨は鶯　山郭公とつまて中宿
日
きくやいかにとうちそての袖　志てら渡るも山の時鳥
古歌
語りしいふ山の庵のさと　人傷ふ笑くたのめかなきく

古歌
思ひはけさよかく涼音伝　人語く打も拾得郭公
日
しゝつ舟の末にもの山えく　限りも声のこゑきく
日
麻山乃精とこれわきまへく　山かくきらめ莫かうつり
東山殿
うち紀こころ夫の小前ひか　なれわたる山雲たちの郭公
日
月も出ぬうけしみをもちゆるよ　くるゝ山の庭の郭公
日
こ声よらうふ事ぬ志せて　きうしたく庭りわたる時鳥
住吉なる
いつさこめて床の紙も待らん　横雲よりも声をかけなく聞き
かくもろ人笑ふ小枝の雨　拾さあのさそ山にかくきす
きやくも月ともちはあめ　郭公今一こゑの比そ莫ふ

○

時鳥と郡とり也三脆
めつしとさくこはこや音長　かくこゑす朝は吉羽の山こえて
我のこや思とひとまつ郭鳥　日　せりけて之代ふく郭公

○たをさ　かくきゝと　異名

神中集
かのころて此田長をはさう鳴居りわすれてさうとなく其を

古今誹諧歌
いくはく田をつくれはかほとゝきすしての田をさをあさな〳〵よふ　敏行

○ゑとり　と月　卯月異名　但かくきゝとは異名と云り

万葉
花の香をよかれわかくやさ此名さへやまつらんほとゝきすの月　家持

○さつきまちとり　堀河院時鳥異名とそ云

○くつてう　時鳥の異名　奥儀抄ニ
きなくさことに雨と山のことしてと下云り

○鶯かひこの内よりほとゝきすと云説

萬葉
ちゝに似てはなかすはゝに似てはなかす卯の花のさけるをけさ鶯の巣に郭公

うくひすの古巣よりたつほとゝきす藍よりもこき声のいろかな　家隆

○伍者　芳野　同志据

続古今
里の名をふる郎公さ月まつ夜すからの此里　雅孝

東山殿
かくきゝ次何とてさ鳴くらんしらてなく鳴ハとふ〳〵の園

夜半千首
時鳥いつみよしのゝ花の雲のかへりかねてもなくらん　定家

まま
三吉のゝ木のしたかくきゝ次こそわれはまちかね侍る

○子規とも云り

六百番
五月雨に山のはに出ていへの夜とや鳥雲のこゑ　きこゆん

刹着能とす

まま
水無月の花咲あをはの蔭きよみ花さかりすてかたりなき

大和物語
日くらしに君まつ山のほとゝきす次さらね世をたてなくまね

日
七年まつまつ卯の花かくさ次世にほとゝきす里にふる　あまよ

千載
ほとゝきすなにかくきけは郭公いつも日のさかみことはの声

一　ほたる

飛けふる雨夜にまよふ星かな　繁

急雨にもえすゝしきやかなる　栢

秋みるハ三河さこのかる蛍かな　巴

月よ霧きて如草葉の蛍かな　牧

飛かゝるや急だてゆくみり　巴

雨もれも七月ともみゆる蛍かな　鞆

舟にさすかゝるも水のけしき　巴

夕ほく夜ひかりわたる蛍かな　吧

風みてかゝるも秋草人の飛　頼

新蔵は
きぬ水り仰さる浅茅まで
みまハかゝるのかけとくは

同
うつゝ迄消えしかる夜れこそ
人ハそかゝるまれ秋ハなし

充家
かゝる後ちるも拇挽なりさ
夜かりけり風雨に揺して

同
人ゐる秋さえ月雨晴て
蛍飛夕川に舟さし揺く

同
立かゝる山松の戸に雨さゝく
かゝ秋さひゆく言葉縁さ

夜深雨後松堂静一點山蛍照岸寒けんや

同
たゝえ秋末れかのゝきを
夕霧よ芝生の蛍かゝれて

保賀とみの
此ハ八十ももし地色とかく成
飛かゝるまさに秋てきる　くま

伊勢物語
あくさりし夜のほたるは消えぬらし　ゆくほたるは袖より八雲下

東山しるし
思ふ事と窓ハ蛍の光とそ　若者の月の涙の夕露も

拾遺
夏虫は身をいたつらになす事もひとつおもひによりてなりけり

子規
昔秋集しらの紙なる人ひ出て　みなれかりのくるかみの露

伊勢物語
うきあかりてひとり思ひに燃ゆく　身をもちてもゆるもえこそ

雨くらくすゝしく蛍とよふけ　水くらくきさまよふ夜の涙はなれ
いとゝ夕秋ならまほしてかりて　夜の涙ハ蛍ならねと消えてなし
その事となく心もわかれさ　うけなく蛍とみえし窓の夕闇よ

沖中抄
暮かゝる夕夜は日くらしなるとしもその事となく物そかなしさ

蛍火乱飛秋已近

老楽
あはれ秋の月を見るへしも　鳴虫とまちてわくるや秋るん
なくもあかぬ物いそさの夕月夜わけつゝ思ひ出よ

いさり火のひかりのみておく霞の里かへるとよみ

まよふ
蛙なくいつみの沢よすむかへるもゆかしひよおもひ

堀川百首
五月雨に草木は落ちけれとかくれなき蛍なりける　匡房

草枯らく蛍と如とこそ

遺根腐兵斬　勝尊　私ハ作ニ君カ窓書案当ニト

むかり草　見るかるの窓とろ草之　史俗第三蛍の是名　とし之

奥儀抄
おとくまよ川秋のなる比ひかり草月かゝるおもかけ道ひかりもみ

蛍とへなる蛍

起業清言
下もえやるかゝりし鳴聲をきこえぬ虫のおもひなれ
なくもあかきそよりのくまなききハなかゆかねかなり
かゝるならてハ虫をはとゝきゆるなかに身の上の涙かな

の家

祇

一　おく庭　源氏物かたりは五十四ノ冊

なく三ゑは紫式部といふ人のおもひよりてかきける物かたり
は五十四帖あり光源氏の君の事を書たるなりよつき
物かたりは源氏の君の御事の外はよろつの事をかくとひ
給ふ夏の比ほひ秋冬のひとへ給ひて源氏君の給ひ
てあるへき事をえらひて引ひろけて見せ給ひ
とおもふこそあれさまさまによそへてかくれたる心を
あらはしてこそはあれかのけふのいろいろの古事なり
是なんあり

しるしのまそれより此のことは世に云ならはせる
この哥秋冬の夢
又紫式部の親王のひとへけり女は袖にあはれなる

三

むかしのことわりをあやしき物かたり親王は清和天皇
御子まてあるの上にもありこの夢の心の文を
とけれはあはれなる事にて

但し

おもこ哉の名よりも星の光を
夜あかしや人の哥のよみし牽牛星　梢
ひとりあひやかの七夕一夜妻　袖　外香牽牛織女星
更よころ霜秋更に星月夜　巴
春と秋とよころひのかり　ひとまつ夜の竹にさしひく

此句は夜ノ星と云事也山寺岩寺にて詠合せられたる
やまふく吹とも秋をまつとも日にほしとは八雲に 御抄
とて上下にわたる事也
年中行事
隠なく久しかるへき年のほし君か為にそ行ふなる 霊
天文暦をみて雨雲風の気色をそうする密奏
星をとふ
古今
星ゆつる池もとまをもや消ぬらん 紀 舟より磨ゆく霧はてり 琴 体
老季
わりうふ弥生
さそく火かのみえ人をとをする うつふ夜の星れ光よ空消く
新続古
北の星の煙を升の庭火打志めり 光も早くわかりつふ天
信永我
霞さえくまたき霜かゝ紀明前ふあかりつふ雲の上人 定家
まま未弥成
あひみむ世ゝに星合の光さす七のわのてらとひ かりけ 明仲

○あかほし 明星
千五百番
その名にもかくやかし星明の光よ星きらす 信季
○夕つゝ 星の異名
まま
暮ぬまは山のはいつる夕つゝのかくれみまてもそれなりけり 忠岑
○かりの林 星のね
まま 六帖 新六
いつも見る月のみとりはこと紀をたく星の中に数ならぬ 家
○あふさうる光る数かりのますらをひとつ紀捕まへしくり 亀山院
○よりひかり
まま
嵯峨山し跡をみそらけそひかりくるれは出て光ならん 如是
○かりのつゝね 百官也
千五百番
曇くれたかりのくつのよ数みえて雲升れしよする 定家
拾遺
天津の星のくつの緒かゝくうゆく末と纏を伝へし代ゝにたえやめ まう 学才

風雅
月
立かへりしる春風光とゝゆふ月の影なき雲かゝる人
時あれやかつ雲ちらく紛ぬる月の影の光なる光　紀
年に生かしといつて光る月に今り夢よ成ふなる月
みられ移り夜の月に出る星のかれ時も一段光と
文九明光そくてき時と光白波雅星と
新古
しらくに雲かよるて時ふりわるつきまる紀かけよ　なり
かし月秋　名不知
秋のひとり蒲金山とあえゆるほは月秋を嫌かり　兼
かしのあ
わかくに紀星の梅や梅のか　也

一　かの
[illegible]
霜におきて秋かのめにも見ゆ　也
[illegible]
雪のふる紀のよろ紀夕けり　吧　鋼のへ色かのめ千す山ちかき
[illegible]
さらぬだにふかのめさなや雅波人わかなやみ夢風情　　[illegible]
月清集
三ケ月の秋かのめ千す夕暮よこゝろの萩の花ちるらむ
新古
山姫の立田の錦よりも色を渡す色に流風よ猶かくめく
[illegible]
かくなんとおもひさり夾かのめの錦追の立ちゐよ　うそ
かのく
月清
かのくと花は和山よかくる雲に千す光明なれ　ゆく
かのくとおもふて定まきふかくしかさゐかく山千すた　うかく
かりくく　朗詠　そのめ　はなのめ　日か
[illegible]
志ゐくあのかゝらくを明光年たとのゝきぬくなりし　信しき

寄 わさらしハねりや川並の小行く眠の月そねむ達ハ岸にかれてくる
隆祐朝 わひみつゝわさたくらもえハつ泉のめ佐ハ路よ節ん舟出せん 定

○ かくらう
孝槃百首 かくきうとまち務くて東雲れかくうゝふくちの浦される

○ かのう
久すミのひまれ日ハかのゝ也 舊こ河り流の波ハ立て 行
為氏 たこの浦よこ浪の舟れ川まてかのゝふ見ん 八重さり

一 かうけ 両義也
伊勢守為 思世流さきえうつし武蔵一並 行 扎 氏うはかうけのさこうも 長
よのかくふちりを了徒す世務の追かうけに花をみうらも 和泉 式部

一 かし 杭
頼政 夕付ゝ和田の浦曲よあくる舟のくこかよひもやしこれ追風 公家 左大下
日 去浦坪りよあまくこうかゝうら舟のかれみ此ひとゝ寄る風くう退ん 日

○ かつら 帆綱之
文永 こもうらよ見にかつらさ布縄あて綜せよ川そひ柳の務に流るゝ 後撰

○ かくうら 帆柱也
古顕後 須磨のもうらは青葉夜山 浮うけの舟れ帆柱せよゝ
かくこうてあくゝもれ山の務 沖おうよみ柱の三つ鐘も舟

一 か 綱
綱り出て秋猶ゐ山のの番 孫
綱よ出て筆なとみ見山田 孫 巴
かふ出くかうち渡とゝめの字 孫 日

ほのみえし秋はさかりのすゝきの形也

一 山麓に穂末雲かゝりてみえし　月

波そよぐやなびくすゝきの風の遊　親

一 新古今
秋の田乃かりほの風のさむくより小雨ふりそふ袖そぬれける　読人しらず

月清
みられけむ秋の行末よ秋とてやすゝきのつゆの　寂蓮

新古今
花すゝき露に[illegible]かゝる袖ぬれて思ふ秋のさかりよ　西行法師

拾遺
あかつきを待てかなしき秋のひとつ[illegible]　[illegible]

〇 続古今
秋風になびくあさぢのすゑのつゆこそあやしかりけれ

信勝抄
うち靡くかりかりそひろくきこゆる雨まよひ田のゆふ風　[illegible]

まま
秋の田のかりほのとこのまくらにも露こそなけれ　よみ人しらず

〇 かへる雁　穂末　梢

枝よくて花咲みてはなすゝき也

まま
墨そめの袖の川原にやなぎかたえみるに[illegible]　仲正

まま
一 つゆのまも梅乃かをすゝめのうちひとの音に似たやまぶきの　入道前太政大臣

一 秋山のかりのなかをしのすゝき花かとみゆる秋風ぞふく

続古今
一 かへり　[illegible]

まま
あさとくに[illegible]かくれかの[illegible]のまくら　定家

まま
ほのかなるとかく山の峰のしるしにそ[illegible]明ぬとの[illegible]　行家

月
となりたる[illegible]雲のうきの[illegible]山の雲風ふけとくる　仲正

続古今
あさうひの山あらしの初雁の声とともにうつせしつかな　基家

月清
後乃世をこのはのみなそめられてとのみきく　[illegible]

いづかたのかへるのやよるかものけふはうらやまし　[illegible]

一 あらし　このころ竹の紀を　伴亦從

続後撰　風さそふ雨そゝりゆく夏のくれも也ひとりさへこの世の中はなき　しらそ

玉葉　わか宿のかくそたえなはあはれ何とき世をいかにせんあつさ　親王

新古　世のうきめみえぬ山ちへいらんにはおもふ人こそほたしなりけれ　素月

拾遺　御狩する駒のつまつく青つゝら君こそ我はほたしなりけれ　読人不知

玉拾遺　山風の花の香かとふふもとには春の霞そほたしなりける　景能

あはれてふことこそうたて世の中を思ひはなれぬほたしなりけれ　肯

一 みつ　柊

まつ雪　きえ雪はのちのえたにはとりそへてみむとこしの白山　家依

一 はこ　かもく

かも居　鴨居トモ云　鴨をいれる時ハかも居とも　又ハ居ハ野のこし

三百首　ちり敷るのとこへかへるはまた寒くかことのみゆる水かくれ　家隆

日　水かさそふ浪のしたゝる鯛居もすせやしよりて鴨なれ

日　松風のかよふに鴨の波たつ夕世さら日なれやしさ

○ かこつまかこめのた

日　わらはへるかもかたるかものねの月をよる月やまち

日　兎上二次鳥ふみとりて鴨やかり羽つひもさなり

日　許もしハ名もしとこえ河ふ鴨ハ名ひかりの秋

旅ねするかもかや

日　かり志支於をのこつくりやけや鴨なれかたくらん

かへる三八初音 春梅 夏郭 秋鴈 冬松 写字通

一 かたかへりの鷹の足よ長き毛出るあり

三百首
鷂のかたかへりは毛の永けれはまた鷹雛のたくひなりけり 定家

一 かたかへりの毛 母衣肩ノ毛トハ後ノ香ノ事也

ホロ 業一サリトハ兄鷹ノ事

一 日
武士のかたかへりの毛や母鷹の業因さりに緋をかけて 三かん 日

一 日
かたかへり 母衣声ナリ 雛山鳥ニ流

殺さそく書やうしかたうしかの鷹のかたかへり雛のあかえん 日

まき
かたかへりの世よおりつけても書付てよねかきつけてかへりつとそ 和泉

霜の朝の草さゆるかたかへり 枚 かたかへりやさそふし 赤く 諭り

かたかへりと鷹を雛の源 稲 雛くのし

一 かたかへよ海こわくらし

神中抄
西雲かかたかへりひかミの雛乞上白毋鷹のそのこ

乳脂ニかへるかへるかたかへりくかたくを夜たなとけ字かくり

酒しや武八云かたかへりよかたへりかへり九かへり日吉之

一 かたかへる 保様呂 ハタラ九

万
淡雪のかたかへりくり消しはせ書良の都しかたかゆ殺之

ホトハト、タトリ日吉之

一 日
桃せこそけさうくとかまりくハかの雪まて経かたかへる

よそよしく鉤かたを明くかたかへりくに宗隠のなよ くり

奥儀抄云此鷹太郎八一たかへる八上ヘトハ日ひくこ之

万葉ニ之掛ニかたかへるくさきはく降と云ル一字ハ掛ニ八汁

云ひんテ雪は書かり法様出来けり飛さそかたかへる 雪の吉

わかた地

一 わかく
信明千首
かく恋しさの絶ぬ思ひや 我かたにくる槌の纜す 長
引歌
家よりまへ文にかつひを弟乾抜につけ是もかのかたに
源氏波の浦宮の時の屋まて名のありこ言ひてつかれ
とかくて有紀行をと波代の人にかけにく待の浦
く世かとし

一 わかそへ 細文織
壽寺
わかくみの浦ハいにしへもふみわかやとろひろ浜の地 土道

〇 わかえ 摂津国
初元
住吉のわかそこによるなみかはくしかつ紀よ貢れ人からむか お読

〇 ほそ谷川 備中
古今
まかねふくきひの中山おひにせるほそ谷川のおとのさやけさ
つかへつるほそ谷川の流れをもいくよへぬらんすみし我かな 兼盛
うつそみのめかれて谷川の流れをしかすかにわかぬ折ふし 女院

一 ほりえ 摂津難波
古今六帖
わたつうみのさしてかへる舟の中にかりえの沖の月かな
千載
芦根はふほりえの水の絶まなく流るゝ人の恋しさのまさる 摂政太政大臣
新続古今
夢とのみほりえの波のよるよるはふしてかゝるの手やつてん 前大僧正

〇 かつら川 山城
新古
あつ上のさしてぞ分れ君か代にみつにひとつのかつら川の水 紫式部

〇 ほつゝ嶋

行水やかはらぬ中も山田の川益体

子哉　かはらぬ雛の様よさくら花ハ年をかさねて白ひなり　尤哉

拾遺　何ぞのきぬ袂ぬれたり朝しぐれ　まつれて見る秋の　入夜

かはりなきはたのさきくちぎりかぞへ昔に年の波の下葉

一　かはる　洞

陰すくし縁のかはや庭の松　巳

月清　文かはしへ家ととりや宿をかへん深山のかたき昔の道　よ

爪雑　くれかねてみちのかたふ沈月のうき世の中ハ数ハたえよ　き　院

後撰　花ころもかさねし空の山まで色かへでまもみちかねてか月と　ちかひよ

比叡そせハ法し参内の時移川りし後出家の心ぞ

観音内陣よりかはりたの所にまいりてよし　徒々　給しと

一　かとけ

帰心成佛ノ心を

初瀬　きかはの濃清く佛よりなる事ハ波をかて渡しさかふる　有り

般若経心ヲ

子哉　昌形のむかしとを昔のミハ草ハ三世の仏の母ぞかし　有自　徳信

拾遺　因かのおよやめさんたん人のかけより入ゆるの御　貞定

月清　朔夕よ三世の佛ふ法のまへおろしたまふ山川の末　よき

ちまへハうきとのかへよきん長佛となかくまてハ父母世　よ　柄

一　かねさやう

拾遺　法華経と神えし事ハ薪こり菜つミ水くミ仕へてぞ得し　元也

一　かのと　胸ノ煙燃し

子る　まつはれ空ハうつろひけりや　杖　篳火絶えまのかねのかたぞ　ありて

尾張　えどり見えてあかねも後の昔しきさかりあまさはたかりのみそ見えて　木尹

かくれなき雨夜乃闇の錦かそれかのをみしかさとり火の 守

○ 一 わらひ 大月

今あるし山きのちりさふかしをそ焼炭衛門が黒 遠信

一 わくて皃 楷

むしろ乗れ浮き節の網わたせ乳かくるを居やさえのこゝろ 吃

かるもたえし無能の雹 巴長寿しる老ほんにかきに

一 わくり娘 河色 上旨

雪から跡ふ中田の里ハ行くふ吃池のわくりハ廷つをる 日

源氏よわくりくらるる是ハかろさしひとことふや

一 わこう 訴の袖や

奥のみつ花わくこつ袋にれ訴さ ひく 蓋つくつみすわをうし火の 親

一 かつおや

借らしわくのうろさうもや 花ハ都のとらわれハ都も

とこ五月あつそわりふみ妹ハ国をのれやとてう月ハ十まの 祇

白菊れ離さひしくみそうふ君より去年の花とせんかな

せうき九月九日ふ中宮の大文詩とうへきもしわり

その日たはうわうさう昔より人その日はふ昔るまでかり

家君の花の菊ふれたなそすつのわかさうかくうハくろ

山家のふきそのかぶもとさおちくあてのわよ麓 しも

一 わハ 知音

一 ねこ 汗
(一字百首) 石竈やて盛日のあまさうかこのたつるんも汗ぬるらん
一 かうの木 栗林 かうしそ
(新六) みちのくのあふくまこの山のかうし木の根もとわまで君とし枌
大野城比叡の山のかうしは梢にて世さらん 張人 家隆
一 ほや野 信濃 種夫野とや
しなのなるかやの原も風の音はそよくさうはいかあかれ
かやは名所也 霜の下をもちつさるや音たかうすき
とこそりてとあるを唯のまで付くるもかの

そよくさこそ八かくあちおりなあまる泪ぬらん
しなのなるかやすうまの種まきしてあまる乱れそや
この哥也紀人かやも男こそひとまてくらしめて
わか今よとうしくれたち女のよわりまさらん
一 かたらひ 縦 文象
みるのまに縦出ぬ花さかり
花をかさとうひそめよとる帰 (東山) 雪
うくひすもゝぬ捕えよ打 かたこうひとつの花の露そ (抄注) 張人
吹風りかとうひとつかりの山のさくはかところひよくら (羽咋) 西行
はくしあり名やりもしそんかうかくかとうかるかの (為氏) 浄称
神うれてつさみかゆらんうゑすその志でわかとろひ (玉葉) 紀宮

一 かたひら 綿摘塗桶ノ様ナル物ッ
かた綿つみ掛て綿をつみけふ雨さへふりける女房 ゑ
またわり雨さくるきハいつしかも也

一 かうつき 山荒 亦 鬼燈
むかしよりつかひきたるかうつきとう云
らんやうにつふてうつくすのかうをさうひ さく
あひさやうこかうてんちしたりとあり

一 かく
新葵 都あて歌舞の兎をたてあつて芝升といひかくにまかり
かくのつかひをとくあ 芳宗 也

一 かくさく 芳さん 亦ととろうき云九 亦文竹ノ芳元
柊迄 宮さへくらひくこの道乃てとのあとかくとしうるあゝもみれ
この斉よく又文竹のとをきて

一 かうしそら雨さ
碧百そ いねかひハすくこみそ志るくおりけりらつえおしてる氏あ うけ 西島 入道
慈る師大須ハ法師すうるといへり

一 ほ わらつめ
しゑとかふたあひく鹿の羽 風水 也

一 かうりう 鳳凰
芦住 百数や桐のことゑ木に位鳥とかともせや竹の色もくらし

一 かや 若菅 信濃
信濃なの種屋の茸に風吹ハそよきそ秋もあかんよ

一 かゝし 信濃

年中行事
時さぬと思ふさりに秋の田のかゝしてしる拍子 [illegible]
大田云

一 へ

一 為之 俳諧 小鷹狩の抄之 去元一年為卜十り
鷹之名
安中八為之ともしともへも鷹家之抄也 [illegible] 日
かく[illegible]にもとかり[illegible]為之へまへ[illegible]の 日
おりまえ紀鷹に給へり日大寄ねと[illegible]やめ[illegible]く人 日
うち面八わろうてやわらく鷹の為之[illegible] 日
大鷹ハ小為之八不入とこゝろ[illegible]て以[illegible]の[illegible]
[illegible]と紀部と云[illegible]ゟ日付[illegible]のおもてや又大[illegible]
[illegible]まり[illegible]大小あり[illegible]
為之蘭[illegible]の[illegible]也
[illegible]て[illegible]鷹の為之[illegible]や [illegible] 定家
日[illegible]れハ[illegible]寸[illegible]也

一 題 経 入ルヘシ

月日題ハ山路にて可有分別事

題に有とも題あるへき百子年之

へし

月花桜

口ニ題をしく雨に衣物也へ萩乃葉よりおく露を置つ ふすらん

一 題に川 讀

隔て月と新と見すも すこ 指

咲のこ春に題そその紙つ そこ

高山 なる山里ハ起きつき花雨て

題にて雲乃たまを

隔て見るやこの山乃末に雲なくてあえぬと桃よさやま遠

雲の上風吹すさまり雲ハ題にて里と花よちるくみよしの

わくれ世ふかくつらしてかりこふまることをさへ やま

題そつらし 俊頼

一 題に 題こ 何も一ツや

一 題いは 卜十九 平と唱也

と

一 とし年 暮

○ 暮年急くの浮世を翔案 体

まゝ木
新玉のかはる暮年のかしこきて民の心をしらんと 知親

○ 年の暮

立かへる年のたてやなほ勢 類

一 としのおはり 暮雨

新撰
行くおはりぬ名残むつびて 暮れおはりのたけさまも 姫

新古今
ては見えとしのおはりよみ人のなほ雨けの暮かふっし 忠住

ひ月立かへるはかしら百敷のとしのおはりのなごり 弥紹

此奇判 右云暮明八文字也元日の事八正朔日の節

舎十七八辞卜訓ス此ゟ云豊明本記ノ云ハ宮中ト
トヨノアカリト読リ即宴會也故正月一日元日ノ節會
日七日ハ白馬ノ節會 十六日踏歌 九月九日重陽 新
嘗會五節会也 此外大嘗會ノ後ノ節会宴会皆豊明ト
シメス日也 豊ハ豊ニ成テ明ハアキラケキカタトアリ是ヲ千
此書リトミゆる所々ニ侍とナリ

まま
美濃山の白玉椿いつよりか豊のあかりにあひそめにけん　行家

玉葉
乙女子か雲のかよひち見えねとも豊のあかりはひかりそへけり　俊成

日かけにも豊のあかりの日数とてさかきはとこの代々にかけ始む　資季
此日数草かさね所あり

○
豊のあかり日みえ紀

千五百番
こよひの山井くを遊ひ夜の日ハ豊のあかりとやみゆらん

是ハ十一月辰日節会也

拾遺
わかきみのとよの浩務の末の人の君をしつを掴を田かくしらぬ　宝枕かし

○
とよさかのあかり

今集
くりかへしの紀豊坂のあかり明日よりは君かさかえん萬代まて

豊たた雲

後多義
たえてハ又とよそくも雲にかよへと宵の月の秋のかけあかり　西貢

ゆくやいかに豊のあかりの雲井に時雨る　桂

○
豊のあかりや

後拾遺
かけまとをかしこく紀豊のあかりやよそに御さうらん　吉つるん

○
豊のあかり　豊の筆居

あてたもと済み入くさのあかん豊のあかりのかけにやむくして

見よまかす豊の罷朧乃ゆふつらけて今すめるわさのかくゐ

○とよら寺　大和葛城郡

続古今
かつらきやとよらの寺の秋の月世にしられて影をそみる　具氏

新続
まよひきし名残の秋をとふ夜半はとよらの寺のいりあひの声　入道太政大臣

続千載
かつらきやみねのもみちもうつろひて青やとよらの寺のそのゝ　かりの　読人不知

風雅
たちわたる山橋本は月いかにふきそとよらの鐘の音もやかりの　前大為氏

或人云文明年中有賢和尚時厩上人七八夜相伴ひとつゝき
かゝるへおもひけり行次に田のかたにわたりける堂をさ
くれはかくしく里人にあひてとへはかしこのかたをさひしき翁
いらく是なんとよら寺とそ云盛高のうちにきこえよ
そのかみ井と云ふ屋あり老人の云く相伴ひていさくけ
此寺せよ両親のあるくれにこれもそこの葉井とや
つらくはふ旧跡をかりのたかきわれは見し

葛城と云ふ十返ほとふりてひくき翁のりし
家なとをうち見えけり其後院ありてをとくなり
土御門内大臣乃家に月次歌合のありし時の御幸
ありし會に古寺の月と云題にて
ゆかりにかゝるとよらの寺のそのかみの井のよるの月　内大臣家
是は文集三位入道さしく風吹つくものつかふすかこ
うる物かて新古入道ちかしとおもひつゝわかゝれ
と大集してタリト衛感しからまいるの是入催する其
家の本もよきちらるゝ人のうちそのゝちハ後息中

一　ねや宮へ家て思ふく詠歌あり

新撰六帖
きぬさの井にあかり　里山池　こくり　縄　揺翁
きぬさの井近きにし一とせにて　行田ゆくを八十三井の秋の月

八雲御抄
雁のなくこゑちの山ハ名日ふるかのさとに時雨る秋のもと　さかり　以上西園院

玉葉
十市より吹くる嵐に白ひゆふ花をちらしてかへのまへきり　為藤云

新後拾
夏よる山の峯ちかく月さえて十市のさとにやよひ衣うつ也　内親王

日
十市ハ名所也すし名所と浅わさ社のあたり也と　後撰

一　とこよ

橘をいふに常世のみといふ也　巴

雁のくる秋風常世の夢の磐　常世乃さとにかへりせん　や

新続後撰
こゑ花も滴ぬ四のみちにかへりくる常世もかりかへるらん

先覚
いにしへの書をよむこゝとあきん

玉葉
都まて事ありちのかりのよハ常世やたひさらめらん　中務

日
秋のきてきくはこゝよりかへるかり夜風緑しき梅子のかう　菜下　後撰

流雅
すし月乃くもゆかりぬれて川とこ世のかしきとう紀なりり　忠岑　氏之

月清
月かし桜のかゝるやまつかなれたきさたり紀みとれし雲

日
久かた鷹雲のそこふ知ぬらんとこ世のくもの秋のわけ初め

常世乃國日本紀ニ蓬莱山とかけりたるとあり松

遠未海のへしくゝ年月ににかりけれくなくそ

まかも猫也わことも世よりの分れたるのかりけふ鶴も　なくこ

この寄蓬莱より分て常世より物うの心をしるなり

古記みえり尊末蓋家帰ニ鶴南ニ也

亦清三寄

拾遺愚
常世出て雁の羽衣ときつくよふして吹秋の夜の風

亦

万葉
わきもこかしるとも見えらのはしの何きことこ世よわまりとみえ　うつろさき

今案ハ此二ツ蓬莱トヨセ子トつゞけてよめるとこよいふ心ヨ
如此ヲ縁スルガ結ニ常世八郷ともいふめりや

一 とこよ 常住 常盤 常滑 掛

風吹てさらに浪こそ寄すれ 類 水鳥のとことはにさはぐ声 つ
今案 とことはにかく夕暮の名残かれ秋ならでこそすゞしかれ
千載 年とともにくもるへだてぬとこよかけ(?)のつまの家 かゝらん
山城の鳥羽と云うけ
古今 とことはに頼めしけふを鶯の鳴くは林のかげに落ちて
津の国の難波わたりを浪山城のとことはにかひなき世の宿 つ
うし風やとゞまらぬなにはとて雨雲の霧やあかくれなき ぞう
久留米(?)もとこよのみなとに浪急なれや夕のこゝろでうき何 中務卿
ことわりぬ吉野の川の常滑にたゆる事なくゆかり かさ

家隆(?)
政人
宗家(?)
定家

奥儀抄ニ此常滑此字ハこゝにたゞへし海中にある岩 也

一 ときは 常盤 年々丸

ときはなる花もさらに知らぬ節は 体
松も色は春秋しらぬときはの梢は 掛
常磐もひとつときはの梢は 咃
風霜のときはに木こそ落つ岾 巴
老盤木の落葉に浅き山 月
ときはなる木の葉の中に浮き 月
ときはくこそ花やそれも白 けふくすむ山のときは 末
春乃夕の清乃さびしさ ときはにふるまふ梅桜も 祇
新古今 ときは山や峰のときはなる高きつりわたしにくもり ちる雲 巴
新古今 夕日さす嶺のときはなる山その色の秋ならしやとも秋 雪の山をく さりしき

仏篆まね

一 やまさと　山里

拾遺
松風もやまさとならぬ山の家の春　体

山科の山のいはほにまよひつゝやまさとならぬいはねのつゆ

日
ならひ出るとやまさとの山のいはしのはるくとやまさとにすみなれ

清之義
色みちてやまさとの山のすゑ麻のそのれ鳴そや秋など　二重之

秋さらもつねやまさとのさと人ハさて衣うつや衣うつらん　志ちらん

まさみ
わさみどりうすめの色の宮色ニやまさとの山も春の代　三ちらん

一 とかへり

清之
とりどりやちよの春秋契るこゝろ君ハとかへり　かくれ

日之義
住吉の雲も花さく御代によろこほく十かへり海かれさき済代　のれ

月清集十ヨリ十巻
例ふる君をは千とせ十かへりも生茂雲の春にさかえん　弟家太ト

とかへりの花さく松もちよふくりかさねのむやきとかさるへき

一 とうしあへ
とうしなへよ萬歳色とふ　歌

一 とこなつ
とこ夏にさくやいつとの花の　長
常夏にみる信かつし錦　経歌
とこ夏よ露とりて白くの　体
信かつしよや常夏に今　巴　ちいく墨
とこ夏は花とさく色のかはり　鞋らへ

一 とこ夏にさつやさうもみの宿　日

仕合之
いかりんと宵は酒よさこゝろのゝ朝かすみの露のとり出ぬ　維因

文哉
常夏の恋もつれなくわさ風と雲のけしきもかはらぬ　具平親王

一 とこなつ 恋つらの哥

咲さかりしる花は心までもつ移ろふ事もなくとこ夏に色を添て　中将

うらなき物独をたのむ夜こゝろのわすれし咲そむ秋をまてさき　なかさ女

月見
ちりをたにすへしと我床に咲しよりいつかわすれとこなつの花　かくり

色かはらぬ心よりて宵の内外の露よりさき　がせ

むかし雨夜の品定めのとこなつのしめやかなる　ことすふ

云よらうして沢辺とみえ添て寸南かよ所は十日　言

の庭よ添てし沢へ入さ分えりしなかよこの巻

小柏まろ恋りんのりこゆかきうつたる袖かな出ぬ

ときこてし時あはし川よく語りしよつてをとせ

那り分かそひは添とわり

一 とこ床

都のうら風もすさまし　神無床にさつる哥の家　祇

草枕むすひ露を行旅て　床をなれて秋ろはかなし　らん好

那り添ても老乃世の中　とこなつはいつも明け　祇

床のさ木に色とてかり咲す秋風のめ見へとも夏よりそ　家隆

夕さまよ入月花床をうらうらひ秋ん春も行秋　凡河内

むかしのけしの夜の恋床に夜とたつ夢の　あかう

之を入る事にかりてての夜くのか床のへさらさし

床は海とくかは山とくかりにけるかなとちりに渡る枕り　家隆

一 こゝろ能こゝ

後拾遺
久方の天乃岩戸の山のはにとまりやすらふ月のかけ
君か世にてらす御影のかはらねは今もかしこき月のみや 俊光
后宮院

一 をしほ山 大原 嵯峨

一 とは 鳥羽

白鳥は鳥羽田八ちまたにあり嵯峨也

新續拾
鳥のゆく道は見えもなかりけり鳥羽田の月にあつる秋風

今集
白鳥は鳥羽山松にならしつゝひとつこの田をかりそめに

新續古今
鳴くひくる出雲のさとて鳥は山雲の行方もなく 定家

詞花
山城の鳥羽田の面を見わたせはほのかにけさそ秋風はふく 好忠

古今
津の国のなにはおもはす山しろのとはにあひみんことをのみこそ 読人不知

後拾遺
年經ぬる松もむかしの山しろのとはにかはらぬ千代のためしに 後嵯峨院

日
末とほき鳥羽田の面にうつりつゝ千代の花さへみ雪ふりけり 定家

八雲
八百萬とし田の面をかりほしてあまの星はいさゆく 家隆

山城の鳥羽のほとりはみなそこに露ちりしく時そおもはる

一 をとこ山 八幡 石清水

古今
いにしへは我家乃山なる名とり川いまをこそよりわりしてすゑ

續古今
ちりをたにはらはぬ家の山川のいまやをさまる御代をまもらん 敦王

新續古今
君ならてせしさにかけくもりなき家の山の月 成定

今集
書こそあれ麻くもりぬ人とりて山の行方にやまさらん 三条大臣

一 と山

うちなひきまさやか山の名判　牧

月清 時雨つるか山乃雲ハはれぬらん夕日にそむる峯の紅葉ゝ

拾遺 深ぬるか山乃庵の夢さへもみちに見なる月をあらしも

一 小倉山

古今 老山よ雪やふるとみんこの時雨　祇

古今 拂ふくあらし山の庵の夕くれはあくまてあかぬ月　太上天皇

一 小倉

小倉 鳴鹿鳴り

今宮家 ちる鹿の白尾の色やまさるらんふる山よなかれ物かなり

日 ちる鹿のこゑにとりあへす涙にそむるつゆのやとりつ

拾遺 こゑやこえの秋よなれしこち鷲のこゑ学ゆる詣けしの　資

三百そ 小倉よ入るの菜外の日あまきや鹿に羽しの葉ふらん　定家

鹿の声小倉よ入卯月八日其時前毛のくとりを羽しの

くとりとそ銅七月十六日の扇鳥やとおりて

歌臨云鳴鹿小倉ハ鳴鹿からく毛をカウハナリ山まて

とふ趣ふる鹿山のり足草鹿也拾鹿ハ行ゆくと

いふ鹿と書二歳ありしとくりしてたゝたす

鹿の鹿銅のなにゝつる鹿のりたぬそと日定

或人の申されしハ鹿ハ七くりとの年おきは

十五ト書亦云十ゆり二定かくらし詠人前おもくニ

十ゆハくこる之ゆりと云りんやるくしと云ニ鹿

祢てらるかりと云ハ百よなかハ鹿待とまてゐかりと

よみけり山かへりは毛をかゆる也 事也 次第に侍る也 まで

毛かへる鷹とも侍りと云り 奥儀抄

玉葉抄
足かへし見えさせなれなん鷹のとかへる山の椎柴を

此言ハ山かへりとも云之

日
み狩場の末野の小野にそむひとつ雲にかくる鷹のこゑよりも さん 長能

我かたにとかへる鷹も成にけり年ハふりまでもうつの鳥屋を

此言葉にも分られ侍る

○

とかへる 鷹 とや

百首
鳥さけひかへりやまの鷹の人のむかしの跡にとかへる也 くれ 西園寺入道

鷹とはとかへる鳥をいふといふ事ども侍る

○

とや山 鷹 若鷹山に伯とぞいへり

日
とかり山かりに出ぬと人もみよ我さへ宿の跡をかりと 日

○

とくら

毛利子る
今朝見えし末野の小のゝかり枕 此とくらの跡を立てひきつね 巴

三百そし
とさけしのたかの跡にたつし此秋のとまる人のかりね山とは めり 定家

○

とりかひ

子る
都へ入りにはならぬ浮瀬にて 秋たつ鷹の追羽もわきたる 袋

三百そ
河舟にのりてくだす人の田のこの鳥をあふさひかりひ 日

野に鷹の我々こそかけぬ水のゆくへそ人のにあく めかり

○

とうり

続古今
ねまちてもさきとかりのみつさとり雲野を秋野にわかれ かなし 光明峯寺

○

とりまち 鳥ふくるの世や

時ましよかりの命のかりとりはそのこころよきてもと付くて しかし 仲正

○

とくら時

○ 千る
くらき夜にあれたる御所の露しく　秋遥なるハとくいたくれ枕　なれや　読人不知

○ まさ木
さくらそてひかり花にすゝらなる庵の外に思ふまゝ　ひたりや

○ とりのこ
定義
なかひの大のみの薬とふみてゆかれハあさてゆきのこゝろもつれ　定家

○ とりがなくあづま
万葉
鳥か鳴あつまさし女のつき日まち明くるよりかたなき年のくるゝ也

日本紀ニ日本武尊東ヲ平ケ給時さかひ山ヨリ上総ノ国ヘわたり給ふニ風あれてわたりかねたまひしかハ

又奥儀抄ニ云日出ル事ハ東ヨリ海上ヲてらしみち給

これにより東ハあかつきといふ理やよりてあつまといひそめたるとなん

あつきを吉く[illegible]東ハ鳥ト云ヘリ東方ハ東

とり

八雲御抄
鳥の子ハ海にひたりくさくらひのをゆくハすけりなし

いぬかひの三ゆきと云ルヲ読ぬとそ

敦相
棠ちり母もおりしとそ鳥ハ生まてかひあはゝるとそ　きこゆ

今案
鳥の子ハまたひろくからたゞ世ハ生ときゆる箱ハ生出す　よし　読人不知

とこの方ハ甲斐國ノ女大内ニ宮仕年経ニ甥ヲ見テ伯母ヲ

読くの家の者とハ伯母ハ捨ラレて老たりまゝ甥ひとつ

かされハ追出して打右の方によりて見そめし伯母

甥と題ストナシ

○ とりかこち　鵆
来山
さえくれて夜の夜半の谷を出てくる　梢とりかれかたに出して忠

○ 鳥のかしらに忠

源氏にもあるのりて思ひ入とくと也八河原院にて松
のひゞきたりかくあるのりて思ひとは言也

○とりのわざ

あるの落やすりて川　体
すなとりもやもは海士の業　類
うきなすくさむ郡をもてあれ　こぎやかの船の網とく　紙

新古今
水の上に浮さる鳥の跡もなくおぼつかなさを思ふ比かな　猶雲

詞花
濱千鳥跡は都にかよへども身は松山にねをのみぞなく

崇徳院讃岐へ雲山白峯と云所に配流せられ給ひ
名をば住居とおぼされて都なる人の方へ遣はさる
とて新院詠

一　とり也　鷲山

東山
むかしの様にの島へのくもり　長恨涓たへぬる道よのかるん　詐

和名抄註
薪僧の雪俵むかしの鳥への鷲山は霧のつゆに汁ならうつもれ　忠岑

鳥儀抄云　鷲山はさは仏化縁つきて入滅の時とりて
霧の林は沙羅の林と云仏入滅の時本にまでほかへ白露に
似たれは鷲の名も申すとそり

子規
鳥也山おほひやうて投ら所なれひとりや昔のあとにくらん　慈鎮

新
[illegible]つて神の霧かとりへのかすくにたしたれ[illegible]　俊成

新続古今
あき野の昔とりのかとへもあすれやいつら所にと思ふかれそさみ　内経

[illegible]
とり也山にふりけれまやこれあらんむらくすら紀宅のう　こゝろ

續千載
あき山さわきね[illegible]さ雲やかさうねそへ[illegible]かるらん　重教

月清
とり也山おほく此への名かり立こさこそ所むやしら雲　[illegible]

一　しほかまさくら山路

ゆふしほ朝遠里小野の花の雪　栖

（月清）遠方の遠里小野の春に見てみよの松乃緑乃朝

（新勅撰）住吉の花のゆふしもそ見分り遠里小野の萩の明ぼの　望廷

（八雲）あはれ人と清見かたより吹く風にしほかぜとそよむなり　貝歌

一　ころさく　たつく日

うつ咲や末もしほりのその菊

おりかつ吹くる風そひの残り香かりにかりかえてここちそよ　仲正

秋ときくこのころもしほりに成りし白菊をかくはとけつかり　読人不知

一　ころさかり

月出は門とさし露ひたくへて別しは花さかりと思ひ見し遠り

（月清）花ちりてあまたのたくなりしに花さかりぬる神のゆうかけて　良經

（続古今）霞にふかふかき雲の峯人おもひかね月の遠さかりぬる

一　ころも　十や　甲州酒折ノ宮ニて　坂折元

ふかのころも九夜の声もなか　長

十日あまり深山や沖の秋の月　歌

このころはすかくも鹿の音よ　木日ころりはこ思ひすてす

一　ころものそし　陸奥

（新拾遺）東路の十符のすかにつくるとも思ひそや世に結ぶらん　家隆

一　とふのすかこも　陸奥

あら馬のほらの沖はかりしはしなさらん人ともとふの菅　経信

陸奥なりて但馬に見こもノ布二番　こも

丈来ニ云岩垣ニ山家嵐と云題
嵐のミさえね吉野よす山邊ハつくまつきけつ十府の菅こも
是ニ奥州ナリかさるへしもそ
倭語抄ニハ十府あミさる菅トいへり又このヒロキコモ
奥州ニ有ナリ但十府ノ郡奥州ニナシ
奥儀抄ニ奥州よこのミいふ菅ふるまゝはさるそ
へくまめつたなるへし

一 七浦

西ふまへハおゆかくみよふく浦のまろあふるも何ろね君
全名抄ニおさるかくみとは舟ノカイナリ小舟又大ヤカ
十九ニ来ツタハメテ家札骨ニタツカクミニ舟といへり
モロこゝろとみ浦を二ね合とちらくふくと云文浦の中ニ
モロコニモト云ト云リ

東山くちおしの七浦ノ苫ニ舟　西行 あまりふ苫かさ二内
ちるまいそる出ぞ舟うせち
寂蓮 黄砂ちる瀬乃浪のひるこきて　基俊
新古今 あつくゝ姪や浦士の七浦ひさしくなれおもね国のを
俊成女 いるか入浦おりかゝ上川さらしくなりけれまりも　月
月清 すみ乃浦の苫屋ふきまね夕霧をたえていも漁の　つとり火
定家 見わたせは花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

一 七浦泊

丈来 おかとものゝろの七浦り小舟ハあまく立田山を吹るゝゆくへん　読人しらす
うきなゝすらしろの七浦り渚抄ろく暮なかれ起ゆく　〓家

一 とかり

こひしらる庵の中秋そろふけさ 了云ゝ次第之山乃ちかく よく

ちまさ名のり里人のともの那 秋草の庵も隣つゝみ 徐道

こ那やこに行ける山をとかくさむ 都そはさふらるみる雲

まま 垣のなる草も人の霜られぬ秋のとかりの屋をおさうかん [illegible]

月清集 世中とは名残とかりのまさと垣ゐのかりにも松あり宮 [illegible]

新六帖 里人の斯とかりへゆくすむやとはいつまてとかりあれ [illegible]

日 家よなき鳥のとかりの垣さしたそとはさふくらる 知家

日 いふまん三河の鳥なとふたふるさむけ宮の絶えぬ ゆ [illegible]

○ とかりの笛

神中抄 み霜のふるのわさらは葉よりかけ鳥そちの言くらして 顕昭

○ とかりふとふかひ

出くいかん人とさらむろよしとは鳥のかうふえるとかひあり 寄

注ニ云 喚ハなりのみかるも不能何之年初あるにに喚とも

ミテホカフ之非も把へのカン二隷ありてあひても侶り

私ひとく出るよとや

袖中抄 毛詩ニ人疾道曰我亦疾則瞨言云く

うち歎きとかりひつなとはもま身に添ふ妹か思ひかくる

奥儀抄ニ云人の事を思ひ全りをかひてその事のけ

一 とかり鳥 扇樋 亦鳶

勇もつかひ野八人をも隠ての絶 なれ とかけくはかりより月の下風 女

秋りもとに雪消れめり 吐 林の鳥を拙の扇起出く 顕

戸おしひらくは山より出し陰　花は雲と袖に覚ゆる白也

名所百首
よし野山雲ゐをわけて明るよりのこる秋の天つ風　まよふ　忠良

新古今
年ふれぬる松の戸おそは時しらぬこもりやすらん山の端の月　兼実

○ 霞の戸　さゝの戸

拾遺六
しも秋の小車あくへしとて夜をまち明すらん竹のまかき戸　和泉

夫木
咲かゝるとなりの宿の藤の花のうしろなる人のいへる秋のゆふくれ　家隆

○ 戸ひらく

五月雨の晴間待夜の戸ひらく巴
なかむれとも鳴やらて松にいかゝ待ともなく夕の戸ひらく明　一声さく

○ 戸さし

とさしせぬ宮に居給ふ人は宮家にて

今案
山桜さかぬ外山の戸さし梢のうつす風ふき窓かけわたる河の　さえ　西行法師 大政大臣

一 たちやう

たなひける雲の戸帳をかけてそのかみの神垣　ふ　入道前太政大臣
源氏より手より帳もいふならひかくこの人をかくしてはやき所　しきさ
おしあけんとあり

一 ありけい

秋風とある催馬楽
わか恋はこよりちとよりかけつる紙大衣きの身山しこふ　さん
そのみさかなふなかよくんありそひさしこもかなよりくん

一 はさう

さ面て　儀なり　京田刈のことなり
伏田かりさ面てとあり

一 とゝぎす そこゝけりしやうしや
なふ山の桔梗の紫こうかゝん まやかし毛こゝろりぬまとなき 兄々く
七 一節に世の人をお須やたくましも 牡 又雞波津もとこゝろの秋 牡
月清 三むよこたゝりとゝ門の上みしその魂やかさゝり秋らん
日 露かゝることゝらみ何か浅茅原くゝ後えまた虫の音もみちぬる 為重女
風雅 秋ゝうしいゝふわゝれのことゝらふ風をとゝけゝ袖の露かは 有家
新古今 我おすゝゝ思ふ手に摘とゝとゝらに袖くゝ三々る庭の春風
一 とゝ渡ゝうり
日 月待とも心わゝれとこすゝ人を重ねとりとかゝゝり渡れなのや 俊頼
玉葉 清くめくもたゝ西思ふゝ成の里ゝ天こえ渡ゝゝり世さかき きん 忠家
み山をわくもつゝれゝやこえ手すかゝりふゝゝれまうし谷
遠親云崩御ノ後ハ双流ヤ人又スカラ清出

一 何こゝろこゝゝらを不同説りとゝこ
一 とらむ 鶯
二条 秋ゝ紀ゝりうゝ上とはわゝのさえ山下とりゝこ嵐の音らん 後人
月清 墨ゝよこともゝ寒み成経く夜更るふすゝゝ月影 家隆
二 とゝめ 寃（トガメ）
うれしゝゝもゝ何まゝらん 雞 思ゝ知の袖のさつゆとゝとあらま
東山 引ゝ手し衾世わを契かま とゝしゝゝその袖のうつり香
よしや君が誠としるくゝゝこそ とゝしむゝに花の色せむる袖
人をとしとゝいさそれもかん
思ひ絵いてうたゝゝかゝし とゝむもゝに楽ひよくつくゝ袂の門

彩藤ゟ
月ところふへ思ひの独われ　誹神の秋よ歌舞とりしきよ　本作

東山
床乃前にねれうらふ手枕ひ　わ風しきおもきへやとうめん

千載
かり人ハとらぬやせん草しおもわやしきるれ読のころれ　と　許親

後拾遺
さらくのかさしふかんさるもこれ春ばかり人家ともあう

榊葉乃春さすえるこれあまりこ　何連てとらもるの神の右にと　ら思ふ　読人不知

一　このぬ　手燭　こ消ハ秋風ふくふにと飛也

後拾遺
うらふ挑清らき点火の下　たまさかに照りとらしかとれ　ぬん

西行
きっしっつてやすとまやさしめん　旅とあかん伝とらん怪き衣り　去

一　ともし火

灯のたうゐ起でをれひかりの巴

草に京さふ灯ハわかうちれ日

残るると月と灯むかろの肉　日

新葉
宿ハ莚てくらゐのひそしも秋山ハ降ハそむ声の色ちの園の　とり次　下野

日
ともしひの光りさらひき深やの内よ小袖も文かれかくそ去ろ　芭子

風雅
ありひ書てもんまと泥みかまてもわたりけたる秋園の竹　おく　嵐英

日
あられずに桂月ふそむかる灯のあかりとは我よ私の下せ竹ゟ　内家

源氏
ともし火の影よらぬ画ふうつまえ始つくりゐとう面影よ見

絶句
院ニ焼灯如ニ白日一沈香火底坐シテ吹レ笙ヲ

三百首
我ぬむし人乃祈りひと照ととらき世よ乃こ寺三乃ところし　次

灯とかさうぬころとぞもしよき世の寺を照る苗りそとる　定家

年中行事
身に向する早けれひろふ雨ふわ那落にかくとるとりし火の　貞世

後拾遺
消まとうこたふなき身ばかり我せもたとろく皆は悟はしく　うけ　去

我もとそ宵くまふ絶ゆ　去　月ふ弟の世かそむしそし火のまと　正

月清
あら紀あや風のまへあふくそし火も立そし八神とあかるらり

引
背灯共惜深夜月

一 とうろ 蛇影

野辺の神よ光のうろひ おひらあく常にともるを くる

一 ともし

奥儀抄ニ云火串同前 武人云ともし八猟師麻を射

火をとうるとあり 本云麻ハ火ニ照ル 艸也 火をたてるほ こまかや

手栽折句

一 ともして箱根の山に明にけりふたよりみよりあふとせし

ほとうにそかり人八麻をともしつや

古今
梓弓はるひさ山に立ちかへく とかくしは雨よ麻のあかれ さ

秋おきの水のつき玄摺のかげ 段 ともしせし麻の妻あらは

ともしすりる高嶺ニ夜りさる鏡に立の すらむしりかくあらう

月清
ともしさすみやまおろしけ山里と鏡をあいておもつきあかけれ かきこの影

一 とぶ火 日野大和

奥儀抄ニ云 都ニ事あらん時ニ火をあくへく道てん為ニ其山ニ

刈穂ニ火ノ備リ 火を付る是を殿ニ合着する所ノ備

火下云飛火下名付

本云春日野ニ火ノ飛ふる事ありこれとみえ其年ノ

吉志と唐門へ参するる事あり是とも飛火と云ノ

新六
行年を飛火乃野もりみそ今いくさかえ 長乃月

わかつし神と祭る山の春日野といふ火の野の雪わか清

風雅
いつしかの野守のかゝみかけさえてうつしそふひは夜半のかゝみなりけり
後拾遺
ちしほ染る羽うつ山路わさゆけは飛かふ雁の羽に露かなし

一 ころもさ
末はさこれも花ちるとさらさ出 風　秀
是はあらしの花のちりくるをいふ
奥儀抄云、末とは切末の切口に末の枝をさす是又良哉に
あれと云、京良哉と我うつし其枝をさして山路をとふ
ふしをとふさと云、京にあれ飛とかふさとふゆゑ、又末ヲ
きる也こりしの飛と云
とふさして舟木きるといふわさ(?)河やちらされいは末に雪まく
とふさたつあしから山に舟木きる末にきりそて舟かへ(?)
神中御云、舟を切舟おこし木のたたを立むかへる 末に幸侍(?)
ころもとして

舟のとふに流さすは一ゝの言ふれはいかゝいと立て
いかし人のとしまさふ立けれは木ふ切りそくかうこと
我思ふ言葉の花のとふさつくる見えのしけふなし 後拾遺
此言右ノ注を祝遠する物也
一 そこもふ　法(?)無帯
千五百番
雲の上は月をたちこやにちえからはゝとこもる物や紛す
今玉集
そこもろ中はふかくれと作者のまつりやとさうしかゝらん
日
春乃りしその日つくはさけかしと又よかにはつこもる
らん
一 とうろく　勤　無裏
毛利集
ふのにはまつてとろ松樹のゝとるかし中車板をとし
千五百番
なけの外にかへて雲はかつてたきそて六日ふくて久立の色
古今
天月雨は見ゆつてゐよかくしき波何とうしとゐさ立かくらん
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貫之

日
天乃原ふミとゝろかしなる神も思ふ中をはさくるものかは　読人不知

一　とこの色
枕連
祠しかる鵜のまつりのゆふくれはそれとなく見わたさるゝ　おもひしれ　おは法師
おきてみんとのこけあやめ草五月雨の　もとのなれ

一　うつろ　露
月花
虫の音もまたうちとけぬ草むらに秋をかねてもむすふ露かな
月清
うちとけて誰よ夜とこそねられぬ秋の月　露の秋のさき
日
わさみとり雲よ霧のうへ山のは風に　きえ　とらん

一　うつ川　円　京織
合点
ひくらしの糸竹とらめ夜そくちらん絶ひとつの夜その雨　小侍従
日
濡つゝそほちし年ハ手すりめくらす紙さらし　忠岑
子宮居
霰ふりつゝ降雪八定さらく春日のかすみ盃の火　定家
合点
風ふくと見えて紙離くちる雨しく花さそふ春の柳の糸　定家

一　とたえ
とたえの筆はにしられぬ硯の巴
萩のうへ露をとめて分は絶所　柏
月清
都人のとふへき絶えて雲ゐのはての山のかけはし

一　とかへ　唱
うつりきて衰ありし年　佛ふかくさつ次の

ごみ入情の三世の仏となりそとも名高く雲は入入　常也

良しれい上ごみ々の雲の上にひかりを素けさこたつさまきり　順宮

一 ごく說

一 ごふらふ 吊死ヲ訪人ヲ

秋の野もよ今年の出の磬すかり我をとめていさとならん

佛のやさうの花とゑめくさうち世の後の世とも今ならん

一 さう 各

巻乃各とはまそ世にたうこさん　月ては寺出と月のとてみうら

一 くり返我が月とう給りもし世は君のか死世へめつる戯くろ　行尊

人ハ伊呂我ろうたきし此歌 長うつや脈か誰かとう歌も葉　些

わとらうく人ハうそかく年月と浮りとうみへ給へそふん　宗力

とられすべ書く浮世の思ひそとも書此輪よかしやそれ　久保部郎

一 とくさきの矢

わさまうやち酒の良そう情ての残うとう紀の矢にうひきを

神中将ろえそそ酒おかられくみ酒とこの良ひ出ハ

矢の根よ酒ありと毒とありてすうひのか歌へ紙對

一 さも矢 得物矢下串り

海とそういの宿のあるや

風とそらからのきうやたちさま立したう對うまとうを浸みかよ　さやまし

神中将こともや八物に渚始矢と云然對南と云儀也

一 とも友

みち絶ぬ今はとふらん雪の友也

雲風のやどるあひ迷ふ柳の牧

新蘇波 あまたねに終へてゆきそめる

東山寺内 夕霜さへ花ちらしのこるけさ　花　友とのこる移りの松枝　信

日 洞とおりぬさのふりかし　長み友はかれ枝の花の陰り雪

日 かくる世にふかれとたびまん　掛　草の花又一本のむせとまるて花

そむるも雲の子と世のかくりもとくとくるこゝろねひく

奥儀抄に曽之の長弓さうんと花さつ生とあくきり

トアリ又月ともしくと招ひさつまてかり稀ん同しま

まもくつて侍り前り

一 さうもまつ雪

秋述 梅の花咲くもさそへみちしの山は友まつ雪に吹はゆる霧　曽之

諸初 みち初く友まつ雲そ鳥羽の道におもふこゝろなり

信京 陀初く友待雪はまち流おつ露しく継いてねうえはなり　信成

一 さうものそめ紀　すりき之ワ子之

南もとちおる友のそめ紀よあくさむらんもわろん秋も苦しき

一 とも沖の　舟奥之役

牧秋述 沖くも舟まつこともつあるもこうよくふさう出るその同なりくり　芝敏

釜量儀経船師　大船師之心

羽条 ともには堅き紀のきつふかつ移く解脱の功よ舟よ纜ひをよ　信政

一 とも すれ友

淡氏 あくとうんつかく繋くうかとまつ吹風よころ荻の上露

一 拾遺 ともすれは風のよるにそ青柳の糸はなかなかくたれそめけり 読人不知

一 後拾遺 ともすれは四方の山辺にあくかれし心に身をもまかせつるかな 坂基

ときしもあれあやしくおもひふしける(?)瀬の神の 人

一 ときしも 時辰

一 拾遺 面影に恋しき時はゆかしきをみしまのみゆきの時そともなき 読人不知

一 拾遺 春秋に思ひみたれて分きかねつ時につけつゝうつる心は 貫之

源氏 ときしわきて(?)わかれにしよ白きかへえ(?)花とりし宿の桜は

杜子美ニ云感時花ニモ濺ク涙ヲ恨別鳥ニモ驚ク心ヲ

軍記ニ云軍陣ニテ凱歌軍神ヲ薦請奉竜時作ト云リ

勝軍ニ成節薦禱神ヲ送上奉ル兕竜ヲ勝ト云リ

○ ときそともなき

玉葉 いくかへり小雲かゝる山かけの松の葉ふる時そともなき 定家

○ 時しもあれ

後拾遺 ときしもわきて秋やは人のわかるへきあらはみるよそ恋しかるへき

○ ときしらぬ

ときし新雨に風のさとしさ

五日一風十日一雨ノ心也

新古今 ときしらぬ山の梅のねはいつとなくかのにほひに雪をまかふく

○ ときつ河風

千載 打わたすや天の川霞時つ風 宣

さそふなる天の川の時つ風 吧

一 ときく

とふくふかりこそやとはなれとも川ばた瀬々のころもなるらん　貞定

一 とくさ 木賊

続古今
月かけもみかくとくさにやとるよりあらはれ出る光のみえくるまて

とくさかるそのはら山の衣そてぬれてみかくぬ露の玉ちるらん　寂蓮

一 と 砥

一 とう 梲 是ヲツカト云

六帖 新六 夫木
いやしくも八重なりわひたる梲のはしらくさみのあらはるゝらん

一 ところ草 蕷 黄精 野老

拾遺
常にのほる春山はなれたるの人　春山のふかきやまのところほる老蔵

拾遺
春のぬさふところにしていかなる人ふかきわかれを君とそなき　兼輔

一 さゝらなき

拾遺
こちとこちこちさゝらに　なりふさらさころもたちかへしさらにはてたらぬ　貫之

一 ところせき 狭也

拾遺
雨雲のたちはなれぬる山ふところせはきにてぬれつゝ袖の　定家

千載
冬きてハひとりねつゝよ篠の葉のさやけきに霜のさえまさる

夫木
草枕篠の葉すゑのかりねにてあまた夜露に袖のきぬらし　能宣

源氏
秋の夜をみむふかきのあはれ野にぬれてあやなき袖の露かな　薫

一 とりのへと

拾遺
秋もあかぬとりのかはかりとさかしきにをみなへしの袖は涙かな　読人しらす

一 さく風
雞阪 とき花よまつ丹うらこにうせ さく出て夕に清き月ハよし

一 さく浪 逆
新雞阪 かしこ紀人挖落とそもそけめる 訓とよろまてる也初の事也

一 さく汐
ひとく汐り皆ともら風や浪やるん みなさ月かりお激すお試書

一 としのせ 万葉ニ毎年ト書り
年のはいや高山や夜の陰 祇

万葉 年のはよきうるく梅ゆへ風とくきてときけとものそわかね且毛
月 秋せこゑやとの山吹咲くわらそ厭さす過なんや年のはわり

○ としこしさ
松道 わらもれとしこえてきかさうりまへてこものいらとひとのこ念

○ としなさ
月庵 千代のちよ年ゐここゆう末の雲くらうらるん君かとさ 宗

○ 年ふる
年をふる木の本たとし杉原 巴

○ 年のうち
としの内外花やわさらか一墾 祇

新拾
ぬれつゝもおりつる年の内にこそいくたびもはらしと云
風月集
春のくるあしたのころもうちかへし年のをそへてたのむかな

○年きり

百韻三吟
能成ぬとのこ花よわかちや　雪　山家の実は年切と花よ　好
大和物語
いかでかく年切もせぬたねもがなあれゆく庭のかけとたのまん
日
花盛春ごとにあらしといひてもせぬとぞ思ふ　愛
日
春毎にゆくのこゝろにさしとまるきまぬとはむかしのへねとぞきく

一 さしろ田、
続山の井
久米さわこと代小田小笹めもへ萠神の宮へ早苗さなゆらん　成房

一 さりね　名所　京花葉　日本記鳥居也

新撰波
落ちくらちゆく秋の末に　霜さゆる花ちりしの鳥羽の宇　まさく
東山千句
小田の早苗をさなか井に　涼　里ちかき絹や起出る朔朝　乳
千句
み池さゆりいさむりもそこうず　涼　古花かわ井の奥ハ前さ　ひとく
風雅
霜さわぐ神の名井のあさりすさくもさらひ色の山　ちく　真経
霜の帰る花表院千年
ちと春ふさかる坂山の境たゝける二の神の森をいさめる

一 さき物　山ノ徒信
新古義
夕されハ霧にうかれて山風の山里の麻そよぐなり　通親
足引の山のさかけよなく麻のはにさて涼るを山田のもえる　古歌

一 さしたて　薦の鳥をよせて付るぬ
名けて水のおよびの雨にぬれてしろくぬぬるて

金葉 面影のわすれぬたびにかゞみ山 おもひやる身はかはらざりけり

一 ともかゞみ

同 くもりなき雲井の空の月影は 鏡とぞみる

八雲 年毎に見るゝの影をますかゞみ ね雪の友のきよく

一 とこ山

武の世やしげる草の花盛 紀氏

思ひやれ たゞおもひやれ よそにのみ 人はゆくとも

山家 くれはてゝ秋とかへる花の色も みちの時ぞ

うちむれてかへるさの山に たちわかれゆく世のならひ

一 とり 本文下 日本紀二 常陸

神中 月も日もかはりたがふ ほどもなく 同じ山の

日 よろづよをみるらむ君が世をふるの白糸 忠岑

宮瀧川の前

一 ここの川 宮瀧川 大和

今案 君が代はここの小川の絶えずして

新古今 伊勢のうみやここの川の流れの絶えぬ 忠季

拾遺 いくかへりなき川の流れて 大君の御名

萬代まで 亀井の水の流れの かはらぬ

はじめにゆく 流れや光 久しく

留のこの川よるせもなし

一 となせ 戸那瀬 山城

千載 いろ見えて恋しき秋の夜のながき 家隆

後京極
戸難瀬河こえは瀬とぞつもりてみえなみちれ渕となる　左大臣

今案
大井河ちるもみぢ葉をながれゆくまくらのしたの瀬々はふちともなれ　云長

一 こら祢

支考
浪抜川の河瀬をこして出てたつ浪よわのとおへぞ君　ろそ

新勅撰
篠ちる神にぬる座主めぐる川の石つ玉もいはれくらう　仲正

まま
こゝ河乃河原を行て浪よる馬石にも乃はかちて行かく　云能

一 こゝ居

志らねころハかしこ西行人　居の跡山によりも世やつらん　祇

ちかし花ころ居を抱ハ　思ひしさるかたき世の跡　日

骨没云山中ニ女抱子泣テ立リ孝子此山ニ行テ是

是を見て女云世のまつりこと事作ら是此山ニ入虎来防テ是ヲ

喰此子親ナニ今喰食テ慈悲と云向後何石帰故之

女云虎ヨリ主悪シ

まま
居とこそて射る矢ハ石りたつ抱とおもひつゝひのこゝろ

此言代ハ須須孫云玄人居ニ喰ありその子七歳なり　さらんん

十三ノ年まて虎を射んと給ふ子里代妙をゆく

ゆくみちに虎りおひて射る矢にそくさらて

矢隔ニ虎ふとさるんまハ虎りし似る石や一念の

うるとおも彩矢立ちんのこゝろうるへきや

於廷
石しつの虎乃よそくあにまかなけくさらや斗よこらんとそ

六条記
部の今行の石やもにりをすそしうへる虎ハ世ありとも　とよ

此言代ハ名の首云世を通て行林虎よ伝ヘ合有

又道ハ為ひ気ノ人ハ此虎よ出行く通虎ヲ云此行林

虎多仏ん事ト〻テ虎ニ喰ヘシ今日ヨリ後通ハシト禁
スレ圧來ル事不止虎主人我ニ近付テ虎ニ喰レニコ
トヲ慈哀ヲ行ノ小獣をかけとらまく飢うる虎よ
身をなけゝ喰らるゝや

（虎経）有如是虎有らん悪口の国乃虎社くらひ与は元通
（斉）猪身経ニ云虎口讒言ト云ハ

君ゆへと虎外ならぬ道をぬ身を捨ん行の末をそ思ひ
名ふしあ伊つらや世をすてゝ人ことなりにけりならぬ[illegible]

一 とう 堂
（柿本従位百首）とうしそ 祈ニハ梅柳ふくつらく西花咲てきまたへる切木　後九条内大臣

一 納涼
（夫木）久方の通ふ四方の風との藻にてあけつゝへ年と中の
（同）風ハつらの雲もきりけの中ゆすみまことそ秋の一こゑ　すゝこもり　寂蓮　少三
青草は秋ミとゝをくる野辺かの虫の音さらぬわさの　久吉

一 さし曲　笛調　横笛図
（玉葉）遠侍ひと鴉の続を漕ゆきは大和らひくる鴉浜にうく秋

拾遺集
舟ながら今宵ばかりは旅寝せむしきつの浪にゆめはさめつゝ　よみ下

一 せき路
さめゆきを紀家の中納言殿也

一 とろ板
鷹とる屋籠　時とやの内にて餌を飼板也
鷹飼の鳥屋にてとらへてそのかはり鷹をとつり

一 とあし
トホシ
人

一 ともしびの　桜狩り
末の世の吉野山乃桜をし山人乃こと世にハのりをさかりみつゝを
あのさくハさくの藤をとをありしらぬまたさかりの思のさて
藤のかふ雲路つりて冬はよさせりおりとすつかりし紀
友明とは日本記り宮家の字也
ころも紀ハ神の法より藤のつかた事さに来ておほひすらしを
ころも紀　爲毎さらふさし
ちとせの古木ふさ抱を揮ゆきさらはさむらひなりておろし
是ハ新勅撰抄哥しら数多ありしや
頭の目貴乃大乃代乃常とかう状也や三代ありハこつまそ
子九ハ哥つや
大原やせうかいや世界孫を友おちて鳥もなくとよもわらなそりん

是ハ何と云ふ節也

我門乃板井ハ清水里ニ遠ミ人しくまねハ水草おひけり

一 とりう

（清氏）たこの浦よと海の再我来を舟かあまのハとまりたるも

一 とさのうら

土佐乃海湊舟うくへくるそひゝら故の名ハ風と雲かり

国立公文書館
National Archives of Japan